
Velcelck ~ベルセルク~

三佐 京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Velcclck 〜ベルセルク〜

【Nコード】

N6633Y

【作者名】

三佐 京

【あらすじ】

異形の者がほとんどの人に認知されていない世界。

少年は異形を殺し、消し、最強の傭兵とうたわれ、非道な殺し屋だとさげすまれ、ただそれだけに生きていた。

ある出来事に巻き込まれ、少年は深い傷をおい、まったく異なる世界へと飛ばされる。

そこは、異業がすべての人に備わった世界。

そこで出会った少女に救われる。

今まで殺してきた者だけの世界で困惑しながら、その出来事を思い

出しては悩み、少女とともに生きる道を選ぶ。

それは、少女の従者であり、使い魔となること。

少年が見いだす答えとは？ 異世界パレルフアンタジー。

プロローグ（前書き）

初めての投稿です。

まあ、生暖かい目で読んでいただければ幸いです。

プロローグ

彼が対峙するのは異の者。

「た、たすけてくれ！」

黒いフードに身を包んだ少年に、中年のスーツ姿の男が命を乞う。

——それは意味をなさない。

乾いた銃声が響く。

そして訪れる静寂。男の頭上を掠めた銃弾が、青年の意志を隠さずに伝える。

「く、くるなっ！」

相変わらず少年は無表情で口すらも動かす気配はなく、徐々に間合いを詰める。

彼はすでに決めている。

彼はすでに覚悟している。

彼はすでに・・・区別している。

「うっ、うわああー」

青年と対峙していた男が視界から一瞬にして消える。

——ミッドアウ
ト
暴走。

その男は人であり、人ではない。魔法や魔術、超能力や異能といった力を有していた。そして、いまその力が恐怖によって暴走したのだ。

それは非常に危険なもの。それは完全に人ではなくなること等しい。同じ異形の者でも恐れるほどのものだ。それはまさに導火線に火が付いた爆弾に値する。

だが、やはり少年は無表情だった。

少年は歩みを止めず、進み続ける。

少年は分かっている。男はそこからいなくなっただけではなく、そこにいないと認識されているだけだということを……。

いや、実際は見えていた。男を視界に入れた瞬間から……消えたように見える今でも、その姿は見え続けていたのだ。

「な、何なんだよお前っ！」

「……」

感情はなく。ただ、殺意の矛先に銃口の向きを合わせる機械的な行為。

——引き金は引かれた。

無が有へと帰る。

赤いそれがただ有へと帰り、人であったすべては地面を抉るように消滅する。

少し遅れていたならば、おそらく青年もろともこの空間そのものが無へとなっていた。

異の者の暴走とは規格外。

男の能力はただの触れたものや自分の姿・・・厳密には認識妨害それが暴走の果てに、認識されるべきものの無への変換となったのだ。

その場に黒いフードを脱ぎ捨てる。

照らし出されたのは、どこか悲しげな瞳、日本人特有の黒い瞳に黒髪はどこか冷淡にも感じる。

不可思議な出来事はこうして幕を閉じる。

そう、少年には憎むべき理由がある。

それは彼の人生を変えるに十分であり、ただそれだけと流されるべきものでもある。

彼もまた異なる部類。

でも、黒いフードを脱ぎ捨てた少年にはついさっき人を殺したとは思えないほどのあどけない姿。

もう一つの顔。

それは日本に籍を置きながら、各国を回り、ありとあらゆる異を異によって消す矛盾を残す中で、人と接する為の顔。

少年はこう呼ばれた。「ベルセルク」と。

矛盾はそれに関わるすべての者に、狂っているのだと思わせ恐怖させた。

ベルセルクとは、英語で狂戦士^{バーサーカー}、故に少年にはぴったりだった。

それは、異の形にしても。

青年はもはやその行為そのものにとらわれていた。

だから・・・過ちすらも平然と起こしてしまう。

故に、招かれることが正解とは誰も分からない。

だが、結果的に間違いではなかったと最終的に下す判断は誰にも分からない。そのときに下すべき者だから。

恋に似ている・・・そう思っのはきつと・・・そういうものだから。

報いと始まり。

報いとは、「因果応報」という言葉の通りなのかもしれない。

目の前に自分がいる。

ドッペルゲンガーと出会ったという意味合い共通するところがある。それは・・・明確に迫る「死」である。

ここは自分の部屋ではない。野外だ。

鏡がおいてあるわけではないし、まあガラスに反射していると言えはわかりやすい。

何処に？

それこそ、死を意味する位置にだ。・・・真上、頭上、空。

ここはイギリスのビルが建ち並ぶ大きな通りだ。そこを普通に歩いてただけなのに、こういった事態になるのはなれていると言えは、慣れていた。

——場所が悪すぎる。

上に見えるのは、自分。

黒い瞳に黒髪の日本人で、わかりやすく肩から提げている鞆には日本語で「清廉潔白なり」が鏡文字で意味不明に見える。

ビルが崩れた。

おそらく、人為的なもの・・・いや、異形だな。

ビルは爆発音はなく、ただスライドするように落ちてくる。

「俺が死ぬ・・・か」

長年の行いが決して許されるべきことではないことは分かっているが、それでも生きたいと思う自分の気持ちは、傲慢なのだと自分が嫌になる。

ただ、落ちてくる壁を待つ。

「*****、**っ！」

聞き取れない声が、言葉が、風が体を引っ張る。

後ろに倒される形で飛ばされる。入れ替わりにすれ違うロープ人影は顔は見えず、綺麗な虹色の光を身にまとうていた。

分かってしまう。異形だと、異端だと。

だが、もう一つの事実も分かってしまう。

後ろに倒れたはずなのに、地面の感触はなく、まるで穴に落ちるような形で視界が歪んだ。

命を救われた。

その意志があつたかどうかは分からないが、その事実が重く突き刺さり、思考を混乱させるには十分だった。

そして、徐々に意識は遠のき、深い眠りにつく。

目が覚めるとそこは見知らぬ天井。

起き上がろうとしたとき、強い頭痛に見舞われ、今まで寝ていたであろうベットから落ちる。

「うつ」

激しい痛みは数分続き、静かに収まり、逆に頭の中がスツキリする。

ドタドタ。

どこからか人の近づく足音が聞こえ、咄嗟に身を隠す。

とは言っても、殺風景な部屋で隠れるところはなく、ドアの死角となる部分に身を寄せる。

ギギギツとゆっくりと扉が開く。

「嘘っ！ 目が覚めていきなり出て行くて・・・どんな人間不信
「よ」

その声は少女のもので、扉から部屋に入ってきた少女は綺麗な長い銀髪を揺らし、とても気品・・・いや、気が強うそうだった。

「たくつ。ほんと、最近の若いやつは恩ってやつを素直に受け取らないのが悪い！ もっと、こう・・・素直に仲を取り持つのが下手」

まるで自分に言い聞かせるかのようにつぶやく少女に罪悪感を覚え、声を掛けていた。

「あ、あのー」

「っ！？」

振り返った少女の顔は、見惚れるほど整っていて、青い瞳は自分を映し出すほどに澄んでいた。

「あ、あんたそんなとこにいたの？ ご、ゴメン。気がつかないで・・・もしかして、聞いてた？」

「こっちこそゴメン。癖で隠れちゃって・・・君が助けてくれたの？」

少女は気が強うそうな・・・まあ、取り繕っているだけのように見えるのだが、そんな感じに腕を組んでまっすぐ目を見て、赤く綺麗な唇を開く。

「そうよ。たいしたことはしていないわよ・・・ただ、家の前に倒れてたから家に入れて寝かせただけ」

「やっぱり、命の恩人だ。ありがとう」

渾身の笑顔。もはや、どれが本当なのかも分からない。だが、言葉を選んで、慎重に探りを入れるように、あくまで感謝の意を見せる。

「・・・ウザイ」

「え？」

次の瞬間、殴られた。

理解は出来ず、ただ呆然とそらされた顔は九十度逆を向く。

視線と顔の向きを少女に戻すと、機嫌を損ねた鬼がそこにはいた。

「私、嘘が嫌いな。強いて言うなら冗談とかも嫌い。そして、そういう取り繕った笑顔は殴りたくなるの。もう一発いい？」

「・・・」

理解できずに、呆然としていると躊躇無くもう一発飛んでくる。

「う、ごめんなさい！」

咄嗟に目をつぶる。

・・・。

来るはずの衝撃来ないことに気がつき、目を開けると・・・ほん

の数センチの距離に少女の顔があった。

「ホントね？ これは契約よ。もし、次があったら・・・撲殺するから」

「は、はい」

「・・・よろしい！」

目の前で笑顔に変わる。それは、花が咲くような綺麗な変化。

「ねえ、お腹空いてない？」

「い、いや別に・・・空いてます」

少女が拳に力を入れたのが分かり、咄嗟に口から言葉が出た。

「私フィーリア。フィーリア・エルファイムよ。・・・友と呼べる者はいないけど・・・フィーって呼んでもらえるとうれしいわ」

「わかった。改めて、フィーありがとう。俺はシン。ただのシンだ」

「シンね。分かったわ・・・じゃあ、詳しいことは食事しながらでも」

その提案に頷く。

部屋の中であまり外の景色には気がつかなかったが、外は朝。

テーブルに並べられた料理は、どれも一つだった料理を無理矢理二つに分けたような様で、目玉焼き卵が黄身が真つ二つで中身が流れ出している。

用意された量は決して少なくはない。さつと作っただであろう野菜炒めや、山積みのパンがその多さですでに満腹感の六割は満たされるほどだ。

「出来たわ！ さあ、食べましょう」

その声にハツとし、苦笑いを浮かべると強い視線が向けられたが、「う、うん」と小さく頷き椅子に座る。

「いただきます」「感謝します」

・・・沈黙。信仰の違い、あるいは・・・そう、カルチャーショック！

「変わってるわね」

「そうみたい」

その後の食事は静かなもので、団欒とはほど遠い。

食べ終わると、フィーは神妙な趣でシンを見つめる。

「シン。あなたは・・・その・・・帰るところはあるの？」

「・・・ないよ」

「そう。じゃあ、私のために死を覚悟する気はある？」

「・・・？・・・？・・・？」

答えは出ない。当たり前だ。出会って数分、命を救われたからと言ってそんな問いにホイホイと答えられるほど短絡神経ではない。

「質問を変えるわ。私の命を・・・人生を救ってくれない？」

「いいよ」

シンは自分でも理解できないが、そう答えなければいけないように感じた。

決して。決して、拳を握る音が聞こえたとか、テーブルがギシギシ唸ったからではない！と言い聞かせながら。

そして、フィーは言葉に出来ない「ありがとう」をシン両手を取って伝える。同時に溜めていた力も向けられたわけだが、悪い気はしなかった。

マゾではないと言い聞かせながら。

・・・数分し、フィーの喜びが収まったのを見計らって、詳細を聞こうとした。

「詳しくは、何をすればいいんだ？」

「え？ あ、そうね。・・・私の従者・・・そして、使い魔になってほしいの！」

理解が出来なかった。

だが、もはや引き返せない。なぜなら、この段階での拒絶はさつき言葉を「嘘」にすること。

すなわち、「死」を意味するからである。

シンは更に落ちるのであった。

報いと始まり。(後書き)

書き方が分からない病です。

お願いです！ 誰かー誰かーアドバイスカ要望をつ！
ネタがほしいー

他力本願ですね

世界と真実。

目が覚めて、開口一番に出たのは。

ハア！。

声にならない何かを代行するため息。

シンはベットに横になり、今の現状と真実を改めて考え直す。

「異世界、フォロンティア？ それに、この世界には異なる者しかいない・・・」

それは、食事が終わり、一悶着があった後、現状を把握する為にフイーに聞いた。

「フイー。聞きたいんだけど」

「何？」

とても機嫌がよく、笑顔でこちらに返答する。

「その・・・従者ともかく。使い魔ってなんのことかなーって思ってた」

「え！？ 使い魔・・・知らない？ 魔力あるんでしょ？」

「魔力って・・・という・・・」

シンは顔が青ざめる。

目の前にいるフィーが、異なる者である可能性が浮上したからである。

「魔力も知らないの？ ホントに？」

フィーは珍獣を見るかのようにしてシンを見つめる。

「おかしいわ！ だって、この世界はフォロンティアよ。頭大丈夫？」

「フォロンティア？ 世界に名前なんてあるのか？」

「・・・重傷ね。記憶が混乱してるのか、それとも、あんたは余程の世間知らず・・・常識知らずね」

フィーはどこか呆れを通り越して、椅子に深く座り呆然としていた。

そして、少しの静寂の後、「仕方ないわね」と言って立ち上がり、シンに「嘘じゃないわよね」と確認するかのように強い視線を向けて、重い口を開く。

「まず、これだけは言っておくわ。この世界の人は誰であろうと、魔力を持っているわ」

その一言にシンは・・・軽い目眩を起こすが、フィーは気がつかなかった。

「……暴走は？」
ト

「何それ？ そんなおかしいことにはならないわよ」

シンは世界が揺らいでいくのが分かる。今までの常識がすべて崩れたのだ。

そして、皮肉にもシンが最も嫌いな学者……とは言っても公に知られてはいない異なる者を狩る側の学者だが、その学者の論文が頭をよぎる。

その内容は、暴走の原因とはその存在による比率と比重による世界の歪みが原因であるとするもの。

要するに、異なる者の割合が少なく、その力は強大過ぎるが故に存在が世界そのものに沈み、本質に迫るからである……らしい。

よって、今いる世界ではその存在が覆って

これが現実。

「フィーすまない。ちょっと、休ませてくれ」

シンの異常さが伝わり、フィーは何も言わなかった。

さっきまで眠っていたベッドのある部屋に逃げるように入る。

嫌に静かな部屋の中。

ベッドは静かに眠りを誘い、情報を整理するために眠りにつく。

すでに外は暗く染まり、夜を告げていた。

今のシンにある選択肢は二つ。

一つ、フィーの為に生きること。

一つ、この世界を壊すこと。

「ふっ。あはははっ！」

笑い出す。

シンには二つの選択肢がアルにもかかわらず、出せる答えは一つしか思いつかなかった。

「俺は、どうやら楽しいらしい」

思い浮かぶのはフィーの笑顔。

それは償いだと言い聞かせる。

とても、とても楽しく痛く命と同じだけのものを背負うという償い。

シンは窓から注ぎ込まれる月夜の光に酔いながら朝を待つ。

世界と真実。(後書き)

やばい短いけど。

ギリギリの毎日投稿完遂中！

ぐだぐだですみません

従者と学園。（前書き）

人物像について

シン 16歳の少年

黒髪に黒い瞳。異端殺しの傭兵兼殺し屋。

身体能力S 戦闘技術SS 魔力AA 異能^{なし}N 魔術技術？

フィーリア・エルファイム 16歳の少女

銀髪に青い瞳。身長ふつうで何故か殺気を身につけている野生？少女。

身体能力S 戦闘技術B 魔力E（最低ランク） 異能？ 魔術技術E

こんな感じです。

従者と学園。

朝が明けた。

早く目が覚め、おもむろに外へと出ると、まさに森の中にポツンと孤立している家だった。

目の前にはどこかへと続いているであろう道。あとは生い茂る木々のみ。

「綺麗だ」

思わず声が出るが、すぐに何か・・・違う何かを感じた。

「誰だ？」

「・・・おやおや。まさか気づかれるとは思いませんでしたよ」

まるで空間が裂けるかのようにして、何もない空間からタクシード男性が現れる。髪は白髪で、赤い瞳が恐怖を思わせる。

「こちらはフィーリア・エルフアイル様の邸宅と聞いていたのですが・・・親族ではないようですが？」

「ああ・・・俺は・・・従者だ」

「なるほど。了解いたしました。申し遅れましたが、私はイルフ・エドール。この度、フィーリア様の入学いたしますエーゼル学園の人事を担当しています。どうぞ、お見知りおきください」

男は軽く会釈。そして、ニタニタと笑いながらこちらをなめ回すような目線を向けてる。

「なにか？」

「いえいえ。なにぶん、人を使い魔にしようとするのは何処ぞの清廉たる貴族か・・・あるいはバカなお方のみで、久しぶりだったもので」

「そうか。たぶんバカなほうだ」

「ふふつ。ご謙遜がうまいですね。あなたほどの従者がいれば・・・使い魔なんてただの齒車にすぎないでしょうに」

「・・・そういう能力か？」

「ええ。ですが、それだけですよ」

シンはふと一つの疑問にたどり着く。

何故フィーはそれほど珍しい人の使い魔を得ようとしているか？ということだ。

「すまない。フィーの入学について、どうなんだ？」

「どう・・・ですか。それはそれは、勉強においてはトップ、身体測定においても上位ですよ」

「魔力には触れないか」

「どうやら、知らない様子。これ以上の詮索は無神経ですね・・・
それでは、またお会いできる時を楽しみにしていますよ」

何事もなかったかのようにイルフと名乗った男は再び虚空に消え、
その気配すら感じなくなった。

家の中に入り、数分後にフィーが起きてくる。

「おはよう。早いわね」

「まあ、いろいろと考えることがあって」

フィーは「そう」とだけ相づちをうつて台所へと姿を消す。

朝食後、朝の出来事を話すと・・・殴られた。

「な、なんで殴る!？」

「え？ あ、ごめん癖よ」

「・・・」

「やめてよ。そんな目で見つめらるとこっちは・・・殴りたくなる
じゃない」

シンはどうやっても殴られるのだと悟り、距離を取って再び話す。

「魔力によつて発動する能力について改めて聞きたいんだけど」

「能力？ 異能のことかしら？」

「そう呼ばれているんだつたらそうだと思う」

フィーは少し首を傾け、考えてから順序を立てて話す。

「まず、異能は一般的に一人に一つ。もちろん、例外はあるわ。で、それを発動するために魔力を消費するわけ。そして、使い魔がいる最大のメリットは様々だけど、大きく分けて三つ。サポートとしての役割、異能の拡張及び併用、魔力共有ってところ。理解できた？」

「ああ、じゃあ使い魔ってなんだ？」

「そうね。詳しくは分からないの。でも、普通なら契約召喚・・・魔力を使つて最も合う使い魔を召喚するって方法。そのほとんどは神話や伝説や架空の生き物ね」

「・・・じゃあ、フィーはなんで召喚しないんだ？」

「そ、それは・・・」

「それは？」

「・・・ないから」

「え？」

「魔力が・・・無いのよ」

フィーの目元には涙がたまっていた。

「おかしいよね。みんなあるのに・・・私だけがないの。だから、友達はいないし、親族もとうの昔にいないの」

どんどん空気が重くなっていく。

「忘れて・・・やっぱり忘れて。昨日のは嘘よ。明日にはここを発つつもりだから、この家は自由に使って！」

フィーは可愛い笑顔。

嘘・・・それは嘘だな。ほんと、楽しいよ。

シンはフィーを抱きしめる。

「え！？ えー！ー！。な、なにしてんのよ！」

「俺も嘘は嫌いみたいだ。・・・そ、その、契約だ。・・・次があったら、またこうする」

顔は見えないが、体に伝わる熱が高くなるのを感じた。

「魔力なんてなくていい。俺がフィーの魔力で異能だ。だから、俺を使ってくれ使い魔として」

「うん。ありがとう」

急に恥ずかしくなって、シンは離れようとするが、腕をつかまれてフィーの顔と向かい合う。

いつもの楽しそうな笑顔。可愛さは無いが、そっちの方が魅力的に見える。そして・・・。

——拳が顔面を貫く。

照れ隠しにしては、躊躇がなかった。

そして、改めて思い知る。フィーは、殴るという行為でしか感情を表せない不器用で、その上で喜怒哀楽が激しい。

それが、楽しいのだと。

従者と学園。（後書き）

疲れた。

文章力無いなーと思い知る。

戦闘はまだ少し先です。 暖かいまなざしをお願いします！

到着と新居

—— おかしい。

目が覚めると、そこは・・・見知らぬ天井。

目の前には一つの椅子がある。

シンは覚えていた。それは、列車の中だ。

「どうなってる」

シンは覚えていない。夕食を食べ、その後の記憶がほとんど無い。

揺れる車内。外から見える景色は自然が多いという外に出たときの印象と変わらない。

「起きた？」

「フィー・・・どういうことだ？」

「うん。夕食に睡眠薬を混ぜたの」

「・・・なるほど。二度とフィーの料理は食わない」

それにしても、この車内まで一人（これでも普通の少年とかわらない）を持って入るって・・・わかってはいたが、フィーはおかしい。

「で、なんで俺を眠らせた？」

「それは・・・一人分の移動料金しかなかったし・・・気が変わったとか嫌だし。それに、お金無かったし」

途中、フィーが顔を赤らめ、可愛いと思ったが最後の言葉でその感情は冷めた。

「結局は金か」

「そうよ！ わるい？ だってこうしないと・・・ほんとに学園まで行けないんだもん」

ほんと退屈しないし、やっぱり楽しい。

シンは外を眺める。

今までの人生・・・ここまで親しく接することが出来た人はいないと思う。

だから、大切にしたいと――

「のど渴いてない？ これあげる」

フィーはよく登山などに使用する鉄製の平べったい水筒を差し出す。

「ありがとう」

――前言撤回。

「うつ。こ、これっ！」

「うん。使った睡眠薬の原液。おかしいわね、本当なら学園の宿舎までぐっすりのはずなのに・・・もしかして、前に服用したことある?」

「あ、ああ」

シンはもはや思考もまともにまとまらない。

死ぬ。永久の眠り・・・。

シンは・・・人間不信になりそうなのを、必死に優しさだ!と押さえつけながら、目覚めるかどうか分からない眠りに引き込まれた。

・・・。

バシッ！ ガシッ！ ジュッ！

痛いまだ眠りが勝っている。

ダンッ！ ドンッ！ ガッ！

痛い痛い痛いっ！

「いてー！ー！」

「うるさっ！？」

バンッ！

飛び起きたところをクリティカルで殴られる。

そして、倒れるまでの瞬間に見た周りは白くて綺麗な部屋だった。

「フィー。いい加減なぐるのやめて。お願いします。土下座でも何でもするからっ」

「・・・じゃ、じゃあ、土下座して」

言われたとおり、土下座する。

「プライドないの？ ったく、興奮するじゃない」

「俺さ、帰るよ」

「いいわよ」

「え！？ ほんとにいいの？」

希望に満ちた笑顔をフィーに向けると。

「うん。あなたを撲殺して、私も・・・その罪悪感に苛まれながら生きるから」

言っていることは素晴らしい。だって、罪を生きて償うのだ。これらの死んで償うなんてバカなやつより幾分マシだが・・・。

フィーがそんな女々しい感情に苛まれる気がまったくしない。

「す、すみません」

「えー逃げてよ。追いかけるから」

「こえーよ。それリアル鬼ごっこだから」

騒いでいると、どうやら部屋の外に誰かがきたことにシンはいち早く気がつく。

「ちょっとストップ。誰かきた」

シンはそう言うと、追うようにしてノックする音が響く。

「すみません。何かありましたか？」

少しオドオドしく、震える少女の声。それを聞いて、フィーは・・・。

「ど、どどどどっしょ」

完全に落ち着きを失っていた。

そして、他人を意識して生活していなかったせいか、鍵を掛ける癖がなかったらしい。

開くドア。そこに立つ青髪の少女が・・・悲鳴を上げた。

「きゃー！ー。男っ！」

あれ？

「どういうことだよっ！」

「・・・きゃー男・・・」

「何言つてやがる。フィーお前なっ！」

ほとんど棒読みで少女の言葉を真似たフィーをにらみ、そのまま何階かもわからない窓から外へと飛び出す。

——三階。

このくらいなら大丈夫だ。

何事もなかったかのように綺麗に着地し、どこかわからないその広い敷地を駆け巡る。

「覚えてろ。あとで、絶対に・・・」

その先は何故か言葉が出ない。

何故か・・・恐怖されるものがあつた。

「俺って・・・調教されてる？」

むなしくなりながらも必死に走る。安全圏を探しに。

到着と新居（後書き）

ひさしでした。

もう・・・つらい。

時間がく時間がく

車が・・・車が・・・教官こわす。

希望と友（前書き）

矢部ー！

誰っ！？

みたいなつまらないノリ。

真面目に書きますw

希望と友

後悔している。

離れすぎたことにだ。本当であれば、あまり離れずに伺って戻る考えをしていたのだが、どうやら本能が「逃げろ」といつていた。

「何処だ？　ここ」

異常に広い庭。宮殿を思い浮かべてもその斜め上をいく広さ。

しばらく歩くと大きな湖が自分を映していた。

そこに映る自分。

さつき、突然悲鳴を上げた少女を見たとき・・・無意識にも殺意を覚えた。

「なんだよ。俺って殺すことに正義なんて感情で誤魔化して・・・本当は殺したいだけなんじゃないか？」

自分に語りかける。

「お久しぶりです」

「っ!？」

咄嗟に体が動き、背後にいる何者かに拳を放つ。

大きな音とともに受け止められ、冷静にその何者かを確認すると見覚えがあった。

「あんたは・・・イルフ・エドールだったか？」

軽く会釈をするそのタクシード姿の男は、学園の人事と名乗っていた男。

「再びあえたことを光栄に思います。ところで、こんなところで何を？」

まるで今の出来事なんて無かったかのように話を進める。

事情を説明すると、「なるほど」と苦笑いを浮かべて歩き出す。

「事情はわかりました。まあ、こちらの不手際もあると思います。なので、付いてきてください」

イルフは背中越しにいい、それについて行く形で会話を続ける。

「それにしても、あの拳・・・なかなかの強者ですね」

「・・・どこから聞いていた？」

「すみません。初めからです。はぐらかすつもりはなかったのですが、深く追求されても困ると思いまして」

「すまない。あと、さっきの拳を受けたときのあれも能力か？」

イルフは立ち止まる。

「驚きました。この手の知識がないと想っていましたので……。ええ、あれは私の異能で加速アクセラと言います。珍しくはありませんが、この手の異能は使い方次第では——」

「——いくつ持つてる？」

「……秘密です。こればかりは手の内ですので」

再び歩き出したイルフは明らかに異なっていた。

空気……いや違う。雰囲気……いや違う。存在……たぶんこれだ。

一瞬にして何かが変わったのがわかる。それがどんなものなのかはわからない……だが、危険だと言っている。本能が。

「それも、異能か？」

「……」

鎌を掛けたのだが、どうやらある程度は頭がキレるらしい。

「答える気はないか。でも、あんたは何か知ってるな俺のこと」

「……」

「黙秘か。良くできている人形デクだな！」

懐から取り出した拳銃で不意打ちを狙うが・・・。

加速し、拳銃の弾を弾き、そのままこちらへと一撃を向ける。

「本体であり、本体ではないか」

「っ!？」

次の瞬間、明後日に向かって放たれた銃弾が弾かれた。

イルフとシンの間に出来た距離。流れた沈黙は、シンの戦意の喪失を告げるようにして湖に投げられた拳銃がポチャンと響く。

「それがもう一つ的能力・・・分身・・・いや、もつと高度な・・・」

シンの推測に降参したイルフが笑いながら口を開く。

「おもしろいっ！ 私の能力を二つ目まで初見で悟られたのは初めてだ」

「で、どうなんだ？ 正直、居心地が悪かった」

背後からまったく同じ声が響く。

「ああ。分身なぞでは比べものにならない。これは七つの運命。セブンスポート 平
行する七つの世界を引き寄せるものだ」

その庭に二人のイルフが姿を現した時点で異常だ。

「なんて、めんどくさい」

「すまない、試させてもらった。この能力で、平行する世界で行った結果を知ること出来る。簡単に言えば未来予知や因果操作にも近い。もちろん、パラレルワールドであって確率は七分の一だ」

交互に言葉を交わす同じイルフが気持ち悪くも感じられた。

「で、俺に戦闘を仕掛けた未来を見たってどこか？」

「ええ、そのとおり。でも、今のようない見抜かれた結果ではなかったので驚きました」

「何か異能でも使用なされましたか？」

その言葉に少し気分を悪くしつつ、首を横に振る。

「これは異能ではない。お呪いだよお呪い」

「そうですか。では、改めてあなたに合わせたいお人がいます」

結構なご身分だな？

そう言いそうになるのをこらえ、庭を抜けると、大きなお屋敷がそこにはあった。

そして、出迎えは・・・金髪の可愛らしい青いドレスにの少女。

「やあ、シンさん。お待ちしております。・・・あちらの世界にいたときから」

希望と友（後書き）

ヤバイ。

いきなりの戦闘とネタバレかつ！

こんな感じです。やっぱり見苦しいかも。
すみません。精進いたします！

黒幕と白幕

豪華な部屋。

ありとあらゆるところに設置された鏡や水晶が目につるさい。

「さてと、何から聞きたい？」

長いテーブルの両極端に座る。イルフは少女の隣に立つ。

シンと静まり余計な雑音がない部屋は、少女の透き通った綺麗な声がよく響く。

「まずは、何故俺がこの世界に来たかについてだ。何か知っているか？」

「うん。それは干渉したからだよ僕が」

「何故だ？」

「んーと。シンさんは――」

「――シンでいい」

「うん。シンはイルフのもう一つの力は知っているね？」

「ああ、七つの運命だろ？ 干渉まで出来るのか？」

「いや、ムリだよ。あくまでシンを見ることしかできない。あくま

で干渉したのは僕だ」

「・・・話がみえない」

「すまない。久々の会話だったもので少々話ベタになっていたようだ」

少女はイルフとアイコンタクトをすると、突然立ち上がってこちらに向かって歩み寄る。

「自己紹介がまだだったね。僕はルーゼ・エリザリア・ルーゼンセルス。長く廃れた名だよ、ルーとでも呼んでくれ」

「微妙だな」

「そうかい？　だそうだよイルフ」

「申し訳ありません」

今のあだ名？はイルフが考案したようで、にこやかに軽い殺意を向けてくる。

「では・・・真名を教えてあげるよ。僕の名前は機械仕掛けの神。
マキナと呼んでもらってもかまわない」

「・・・」

驚き、よく理解できない頭のまま。

マキナはシンの目の前まで来て、そのまま見下ろす形で微笑む。

「マキナとはあの機械の神のか？」

「間違いじゃないけど、厳密には機械を依り代とした雷の神。情報の神でも間違いではないよ」

「で、その神様はなんで俺を助けた？」

「ついでだよ。一石二鳥。暇つぶし」

マキナはくるくる回ったり、右手で虚空を指したりと機嫌が良さそうだった。

「で、なにのついでだ？」

「そうだな。世界の変化はいつ起きるかわからないから、調節するために^{ブラスター}加速器を生み出したんだけど・・・想った異常に加速しすぎたから取り上げようとしたら。その穴に落ちたみたいない感じだよ」

「よくわからない」

「説明下手でゴメンね。まあ、簡単にいえば偶然だよ」

運命なんて信じたりはしないが、どうしてかそれは仕組みられたかのように想える。

だが、目の前のマキナはニコニコ笑うだけで明確な答えは教えてもらえそうにない。

ため息と同時に席を立つと、そのまま玄関へと向かう。

「もう行くの？」

「ああ、俺のご主人様がたぶんそろそろ痺れをきらして、拳を握ってお出かけしそудだからな」

「残念。女子寮ならこの屋敷を出てまっすぐだよ。後は・・・もうすぐ入学式だ。君も出席するといいよ。その愛しいご主人様を不機嫌にしたらダメだね」

どこか意味深な発言をあえて気にせず屋敷を出て、フィーの待つ部屋へと向かった。

運がいいのか悪いのか。

ちょうど、入学式に向かう集団に出くわす。

男子の姿を見て、女子校ではないことがわかりほっとし、フィーを探そうとしたが人が多すぎて困難だ。

「一度女子寮に戻るか」

行列を横目に女子寮に向かい、飛び降りたであろう部屋を探す。

——いた。

三階の端の窓・・・異様な殺気が溢れていた。

「フイー。いるか？」

言葉をその窓に向けて言うと、突然開き、黒い人影が位置エネルギーを利用してこちらに向かって襲いかかってくる。もちろんフイーだ。

さすがに受けるわけにもいかず避けると、追撃の一撃が放たれたのでそれを片手で受ける。

「遅い。いままで何してたの？ 殴るから説明して」

「普通逆じゃない？ そ、それよりも入学式」

「くっ。それもそうね。急ぐわよ」

あえて、「待っていてくれたのか」とは言わない。逆に殴られそうだし、何よりいきなり走り出したフイーに言葉を掛ける暇がなかった。

話されないようにしてフイーを追いかける。

改めてフイーの身体能力の凄さを認識した。

女子寮から入学式が行われる闘技場のようなドーム型の建物まで感覚ではあるが六百メートル。それを四十秒弱で走りきり、息も切れないところを見ると本気ではない。

だが、それだけの早さで走ったにも関わらず、そこで待っていた

のは聞き覚えのある声が響き渡る光景。

「ちょうどいいね。遅れてきた二人。君たちには罰として手伝ってもらうよ」

丸い客席の目線がすべて集まり、その中央に開けて、客席から高さを置いているスペースにマキナとイルフ、そして先生と思わしき人が数人こちらに目を向けていた。

混乱するフィーをみて、気づかれないように小さくため息をついて「こういうことか」とマキナを睨む。

「まあ、そう怒らないでよ。君たちにも遅刻してきた非があるんだから・・・そうでしょ？」

含みのある言い方に折れて、シンは潔く諦めてうなだれた。

「うんうん。じゃあ、ここまで降りてきて。裏手に別の入り口があるから」

シンは混乱し呆然としているフィーを引きずり、一度闘技場から姿を消し、マキナのいたスペースに降りる。

姿を現すと、マキナとイルフと先生と思わしき人たちは観客席に移動し、代わりに青い髪に黄金の瞳の少女が腕組みをして立っていた。

「来たようだね。じゃあ、剣見けんみを始めるよ。そこにいる三年のミリア・ヴァルヴィレと模擬戦してほしい」

いきなり理解できないことを言われシンは「なんだそれ」とフィーに小声で言うが、まだ頭の中が混乱しているらしく、返答はない。すると、ミリアが口を挟む。

「よろしいのですか？ 本来、剣見は三年と一年の優秀者を一人ずつ競わせるもの。それを適当に選び、その上二人など」

「ああ、大丈夫だよ。すべて満たしている。彼女、フィーリア・アルファイムは学科トップ、戦闘技術も上位。そして彼は彼女の使い魔だ」

「使い魔？」

ミリアが驚き、観客席がざわつく。

「めずらしいけど。正真正銘の使い魔だよ・・・人間のね。今は廃れてしまったけど、人間同士で契約することも出来る。今は召喚が出来、最も自分に合った者と契約できるから忘れ去られてしまったけどね」

少しの間を置き、ミリアは納得し構える。

「そういうことならわかった。では構える新入生」

二人に殺気が向けられるが、臆することなくようやく理解できたフィーがシンに向かって拳と言葉を放つ。

「あんたのせいよっ！ 避けるなっ！」

シンは拳を避けるなど言われたので受け止める。

「ついてないわ・・・準備はいい？」

「ああ」

シンは前、フィーは後ろで強いまなざしをミリアに向けると、マキナが声を発した。

「よし。じゃあ、始めよう！」

剣見が始まった。

黒幕と白幕（後書き）

投稿ミスりました！

ごめんなさい

しかも、消えたからなんかデタラメぽいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6633y/>

Velcelck ~ベルセルク~

2011年11月29日15時49分発行